

「教育と公共」研究部会（第36回）

日時：2022年5月13日（金）13:30～16:00

場所：オンライン（Zoom使用）

出席：上野正道・浅井幸子・狩野浩二・田嶋一・仲田康一・藤井佳世 各兼任研究員
吉久知延所長・山口和人・川上智子（野間教育研究所事務局）

内容：（1）藤井研究員：「ドイツにおける1960年代から1980年代初頭における教育と社会」

1. 1960年代から1980年代初頭における〈政治的状況〉〈社会・経済状況〉〈教育状況〉の変化
2. ドイツにおける批判的教育科学
 - ・1960年代頃まで精神科学的教育学が主流。その後批判的立場から批判的教育科学が誕生
 - ・フランクフルト学派の批判的社会理論と学生抗議運動の結びつきの中で「批判的 - 解放的教育学」に発展。特徴は教育における「一致に代る意義と抵抗」「コンフリクト回避に代る推奨」「不合理に寄与する社会的関心に代る批判的合理性」「イデオロギー批判の啓蒙」「他者決定に代る自己決定」「現存の再生産に代る社会的変化」「階級・誘導に代る平等なチャンス」「競争に代る協働・連帯」の志向。後に教育改革失敗に伴い教育学研究の前面から後退
3. 教育改革を振り返る
 - (1) Rolf Schellhause の紹介：反権威主義的な学生運動が戦前から続く権力構造などの「戦後西ドイツ社会のタブー」を浮かび上がらせ、学校を「教育学的、内容的、教授学的、持続的に民主化・人道化させた」
 - (2) Cornelia von Ilseemann の紹介：生徒らを批判的で自立し、連帯感のある人間になるための教育を目指し学校の質向上に取り組んだ

（2）仲田研究員：「英国における新自由主義教育改革の極北～あるアカデミー校のエスノグラフィから」

1. 『学力工場の社会学－英国の新自由主義的教育改革による不平等の再生産』（クリスティ・クルツ、仲田康一監訳・濱元伸彦翻訳、明石書房、2022）の紹介
 - ・ケースとしてのドリームフィールズ校
 - ・調査の概要：00年代後半に実施。18ヵ月をかけて生成した200ページにわたるエスノグラフィ。保護者・教師・生徒46名の半構造化インタビュー
 - ・学校の地域性と学校の成果／規律は自由への道／厳格な規律主義／測定の細分化と可視化受忍される規律／黒人・労働者階級の有懲化—危険視されるアーバンデリー・キッズ 規律のダブル・スタンダード／規律主義・成果主義の裏側／白人・中産階級のヘゲモニー格差のスループットとしての教科セット分け／優遇と間引き／白人・中産階級の植民地化
2. 著者の結論および提言：学校のあるべき方向
 - ・能力別グループ分けのない教育システム

- ・人種差別や貧困が社会の基礎構造をいかに損なうものであるかの認識
- ・教育のわざに重きを置き、批判的なペダゴジーが促進されるべき
- ・教師養成は、人種差別と階級の偏見を解決された歴史とせず、現在の問題として取り上げる姿勢に基づくべき
- ・絶え間ない測定によるストレスをもたらすヒエラルキー的文化の見直し

・次回研究会 6月24日（金）13：30～